

## パリジェンヌのワークライフバランス

株式会社グッドバンカー  
リサーチチーム

パリジェンヌのドロテーさんと知り合ったのは、パリのシャルル・ド・ゴール空港でした。アムステルダム行きの飛行機の出発が大幅に遅れ、待合室で隣り合わせた乗客同士は自然に話し始めました。アムステルダムから、更に中国の上海へ飛ぶので、乗り継ぎ便に間に合わないのではないかと心配していたのがドロテーさんです。待っている間にすっかり話が弾み、その後ドロテーさんの姉のバネッサさんとも友人になることができました。

ドロテーさんは 29 歳の法律家、専門は国際法で、国連で、戦時下における人権の問題に取り組んでいます。普段はボスニア・ヘルツェゴビナの国連機関で働いています。両親と姉はパリに住み、ボーイフレンドもブリュッセルの国際機関で働いているので、親しい人達とたまにしか会えないのが悩みの種です。ドロテーさんにとって、自分のキャリアの追求は、そのまま、世界にどう平和をもたらすかという問題につながっており、プライベートのハッピーなイメージを漠然と考えているようなことは、あまりないそうです。

ドロテーさんの姉のバネッサさんは 32 歳、パリでイギリスの金融機関に勤めています。元々は広報やマーケティングが専門でカナダで 4 年ほど働きました。帰国して同じような職が得られず、今はイギリス人上司の補佐役として秘書的な業務から渉外まで何でもこなしています。

バネッサさんによれば、フランスの女性が法律でどんなに守られていても、実際に働きやすいかどうかは、やはり会社のカルチャーに依るところが大きいとのこと。出産して会社に復帰しても、何か居づらかったり、前と同じやりがいのある仕事を与えられず、転職する女性たちも多いそうです。ただ、現在のフランスは失業率が高く、簡単に良い仕事は見つかりません。バネッサさん自身も、今の仕事は、必ずしも本来の自分の専門を 100% 生かしているとはいえない、と思っています。でも、上司はいい人だし、時間的には余裕があるので、夜、絵画教室に通って、そこで色々な人たちと出会い、刺激を受けることが今の生活の満足感につながっています。「自分は強いキャリア志向があるわけではない」と言いながらも「でも一生仕事は続けるわ」ときっぱり言います。「だって今はもう結婚が女性を守ってくれるわけではないし、先のことは全く分からない世界だもの。ひとりで生きていけるだけの経済力を持つことは基本よ」「でも…」と続けます。「結婚して子供は持ちたいわ。そしてその時は仕事は週 2~3 日にして、余裕を持って子供を育てるの」「それからもうひとつ、他人のために尽くすというのが自分の人生にとって大事なことだと思っているわ。カナダでもエイズの子供たちの施設でボランティアをしていたの。」とも言います。

恵まれた家庭に生まれ、高い教育を受けた二人の姉妹のキャリアプラン、そして結婚や子育てに関する考え方には微妙な違いがあります。働くということを、自分の人生の中でどのように位置づけるのか、ワークライフバランスというのは結局、生き方の選択なのですね。